

**BỘ GIÁO DỤC VÀ ĐÀO TẠO
TRƯỜNG ĐẠI HỌC QUẢN LÝ VÀ CÔNG NGHỆ HẢI PHÒNG**



ISO 9001:2015

KHÓA LUẬN TỐT NGHIỆP

NGÀNH: NGÔN NGỮ ANH – NHẬT

**Sinh viên : Đinh Thị Thu Phương
Giảng viên hướng dẫn: ThS. Phạm Thị Huyền**

HẢI PHÒNG - 2019

教育訓練省
ハイフォン経営・技術大学

日本人の花見について

卒業論文

専門：英語－日本語学

学生 : ディン・ティ・テウ・フォン
指導教官 : ファム・ティ・フエン, M.A

ハイフォン - 2019

BỘ GIÁO DỤC VÀ ĐÀO TẠO
TRƯỜNG ĐẠI HỌC QUẢN LÝ VÀ CÔNG NGHỆ HẢI PHÒNG

NHIỆM VỤ ĐỀ TÀI TỐT NGHIỆP

Sinh viên: Đinh Thị Thu Phương Mã SV: 1512753044

Lớp: NA1901N Ngành: Ngôn ngữ Anh – Nhật

Tên đề tài: 日本人の花見について

NHIỆM VỤ ĐỀ TÀI

1. Nội dung và các yêu cầu cần giải quyết trong nhiệm vụ đề tài tốt nghiệp
(về lý luận, thực tiễn, các số liệu cần tính toán và các bản vẽ).

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

2. Các số liệu cần thiết để thiết kế, tính toán.

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

3. Địa điểm thực tập tốt nghiệp.

.....

.....

.....

CÁN BỘ HƯỚNG DẪN ĐỀ TÀI TỐT NGHIỆP

Người hướng dẫn thứ nhất:

Họ và tên: Phạm Thị Huyền

Học hàm, học vị: Thạc sĩ

Cơ quan công tác: Khoa Ngoại Ngữ, Đại học Quản lý và Công nghệ Hải Phòng (Đại học Dân lập Hải Phòng)

Nội dung hướng dẫn: 日本人の花見について

Người hướng dẫn thứ hai:

Họ và tên:.....

Học hàm, học vị:.....

Cơ quan công tác:.....

Nội dung hướng dẫn:.....

Đề tài tốt nghiệp được giao ngày ... tháng năm

Yêu cầu phải hoàn thành xong trước ngày tháng năm

Đã nhận nhiệm vụ ĐTTN

Sinh viên

Đã giao nhiệm vụ ĐTTN

Người hướng dẫn

Hải Phòng, ngày tháng.....năm 20....

Hiệu trưởng

GS.TS.NGŨT *Trần Hữu Nghị*

CỘNG HÒA XÃ HỘI CHỦ NGHĨA VIỆT NAM
Độc lập - Tự do - Hạnh phúc

PHIẾU NHẬN XÉT CỦA GIẢNG VIÊN HƯỚNG DẪN TỐT NGHIỆP

Họ và tên giảng viên:

Đơn vị công tác:

Họ và tên sinh viên: Chuyên ngành:.....

Nội dung hướng dẫn:

.....

1. Tinh thần thái độ của sinh viên trong quá trình làm đề tài tốt nghiệp

.....

.....

.....

.....

.....

.....

2. Đánh giá chất lượng của đề án/khóa luận (so với nội dung yêu cầu đã đề ra trong nhiệm vụ Đ.T. T.N trên các mặt lý luận, thực tiễn, tính toán số liệu...)

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

3. Ý kiến của giảng viên hướng dẫn tốt nghiệp

Được bảo vệ Không được bảo vệ Điểm hướng dẫn

Hải Phòng, ngày ... tháng ... năm

Giảng viên hướng dẫn

(Ký và ghi rõ họ tên)

CỘNG HÒA XÃ HỘI CHỦ NGHĨA VIỆT NAM
Độc lập - Tự do - Hạnh phúc

PHIẾU NHẬN XÉT CỦA GIÁO VIÊN CHĂM PHẢN BIỆN

Họ và tên giảng viên:

Đơn vị công tác:

Họ và tên sinh viên: Chuyên ngành:

Đề tài tốt nghiệp:

.....

.....

1. Phần nhận xét của giáo viên chăm phản biện

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

2. Những mặt còn hạn chế

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

3. Ý kiến của giảng viênchăm phản biện

Được bảo vệ Không được bảo vệ Điểm hướng dẫn

Hải Phòng, ngày ... tháng ... năm

Giảng viên chăm phản biện

(Ký và ghi rõ họ tên)

目次

| | |
|--|----|
| 謝辞 | 1 |
| はじめに | 1 |
| 内容 | 3 |
| がいよう | |
| I. 概要 | 3 |
| れきし | |
| II. 花見の歴史 | 4 |
| III. 花見というのはどういう意味ですか。 | 7 |
| IV. 世界に伝えたい日本文化～なぜ日本人は花見好き？海外との6つの違い | 9 |
| べんとう はってん | |
| 5. 弁当 の発展 | 14 |
| V. 桜から料理 | 16 |
| だんご | |
| 1. 花見団子 | 16 |
| 2. 花見弁当 | 16 |
| 3. まとめ | 17 |
| ☞（注意点） | 18 |
| 1. エア花見 | 18 |
| もんだい | |
| 2. 問題 | 18 |
| VI. 現在の花見 | 20 |
| かいか まんかい ちいきさ | |
| 1. 開花 ・ 満開時期の地域差 | 20 |
| VII. 日本人なぜ桜の下で花見をするのか？ | 22 |
| 1. の時代から桜は、はかなく美しい存在だった | 22 |
| 2. 桜、梅の後塵を拝す | 22 |
| 3. 平安時代、桜が植物界の天下を取る | 23 |
| 4. 平安人の桜 LOVE を今に伝える数多くの和歌 | 23 |
| 5. 秀吉 の大規模な花見がのちの宴会行事のモデルケースになる | 24 |
| 6. 暴れん坊将軍が桜の名所を江戸各所につくった。 | 25 |

| | | |
|-------|-----------------------------|----|
| 7. | ソメイヨシノとともに日本全国に花見が広がる | 25 |
| | じゅしゅ | |
| VIII. | 花見の樹種 | 26 |
| IX. | 日本国外の花見 | 27 |
| 結論 | | 30 |

謝辞

最近の卒業論文が完成する間に、私はたくさんの助けと時宜^{じぎ}を得た支援^{しえん}を受けて、割り当てられた卒業課題をよく修了^{しゅうりょう}するためにすべての困難^{こくふく}を克服するように奨励^{しょうれい}した、私は本当にありがとうございます。

まず第一に、ハイフォン私立大学のチャン・フー・ギ（Trần Hữu Nghị）校長にお礼を申しあげたいと思います。校長先生のおかげで、最初の卒業式の仕事を受けてくれて、時間通りに卒業できたのである。私は心から感謝する。

第二に、私はチャン・テイ・ゴック・レン（Trần Thị Ngọc Liên）学部長をはじめ、ハイフォン私立大学の外国語学科の先生に感謝することを表したいと思う。レン先生は価値のある情報、タイムリーなサポートと熱狂^{ねつきょう}的なガイドを提供^{ていきょう}してくれた。ですから、私が時間通りに卒業する機会を逃さないようになる。

特に、私は4年間教えて、3ヶ月間私の論文を完成するのを指導してくれた日本語教師のファム・ティ・フエン（Phạm Thị Huyền）先生に非常に感謝している。フエン先生は熱心な先生で、忙しい仕事なのに、できるだけ多くの学生を支援するために自分の貴重な時間を調整した。先生は心をこめて教え、それぞれの間違いを細かく修正して、それにフエン先生に多くの役に立つ知識を与えた。そのおかげで、今日私は学校が割り当てた卒業の仕事を完了することができる。心からお礼を申し上げる。卒業論文は私が見つかるものだ、多くの欠点があるだろう、私は各先生からのご意見を受けたいと思う。

ハイフォン、2019年6月

学生

ディン・ティ・テウ・フォン

はじめに

子供の頃から、日本は桜の国であることを知っていた。それは、日本のアニメやテレビドラマ、ゲームなどのメディアの中で、満開の桜が舞い落ちているシーンをよく見てきたからだ。

大学に入り日本語を勉強してから、新渡戸稲造の『武士道』の冒頭にある「武士道は、日本の表徴である桜花にまさるとも劣らない、日本の土壤に固有の華である」や、本居、桜は日本の象徴であり、あるいは日本人の精神世界とつながっていると考えるようになった。さらに、ルース・ベネディクトの著作である『菊と刀』に影響され、桜から日本の国民性を見出そうとする考えに辿りついた。

このように、桜は日本の代表的な花であり、日本人に古くから愛されつつ、それに、日本人の精神を代表していると思ったのは、私のような外国人はともかく、大勢の日本人も同じであろう。

ただ、日本と桜との関係の実態はどうかであろうか。桜について周りの先生に聞いてみたが、「満開の桜はきれいで好きだが、その時期を過ぎると、あまり桜について考えていない」とか、「花より団子、桜が好きというより飲むほうが好き」とか、「桜は自分の精神を表していることなど考えたことはない」など、今までの自分の考えを裏切ったような答えが続々と出てきた。つまり、桜と日本の国民性や日本人の精神性との関係については、当の日本人の多くでさえも、深く考えていないということである。つまり、当初筆者が持っていた日本と桜との関係についての認識から大きなズレが生じた。このズレに対する戸惑いは、本論文に辿りついた最初の問題意識であろう。



富士山とともに、桜は日本人の強さと忠誠心の象徴だ。
これは風水、陰陽、唐の土地の運命だと言う人もいる。

この卒業論文では、日本の伝統なお祭り、花見について深く究めると申し上げる。桜が日本のような言語における洗練で、儀式を重視する国の象徴的な民族お祭りとなったのは当然じゃない。

花見について私が知っているほど、繊細な視点をはじめ、日本人の知性や才能などに感心する。

本論文では、桜と伝統的な外国祭りの比較を行う。比較の側面は形成と開発の歴史といったものに基づいている。どうして花見は日本人に大切だろうか？本論文は主要な項目から含める。それは日本人の伝統的なお祭り一般的なものから完全な詳細まで紹介する。

内容

I. 概要

花見は、主に桜の花を鑑賞し、春の訪れを寿ぐ日本古来の風習だ。梅や桃の花でも行われる、別称は観桜である。

桜は、日本全国に広く見られる樹木だ。花見で話題になる代表的な品種のソメイヨシノはクローンであるため、各地で「休眠打破」がなされてから各地の春の一時期において、おおむね地域毎に一齐に咲き競い、日本人の季節感を形成する重要な春の風物詩となっている。

サクラは開花から散るまで 2 週間足らずであり、「花吹雪」となって散り行くその姿は、人の命の儚さになぞらえられたり、または古来、「桜は人を狂わせる」と言われしてきた。

ひとりで花を眺めるだけでなく、多人数で花見弁当や酒を愉しむ宴会を開くことが伝統的である。花を見ながら飲む花見酒は風流なものではあるが、団体などの場合、乱痴気騒ぎとなることも珍しくない（「諸問題」の項を参照）。陰陽道では、桜の陰と宴会の陽が対になっていると解釈する。

花見は、訪日外国人旅行の来日目的になったり、風習としてアジアや欧米に伝わったりしている。北半球と南半球は季節が逆転しているため、地域毎に年中行事として花見の時は異なる。

II. 花見の歴史

日本の花見の歴史は下記に書かれている。

「日本の花見は奈良時代の貴族の行事が起源だといわれる。奈良時代には中国から伝来したばかりの梅が鑑賞され、平安時代に桜に代わってきた。それは歌にも表れており、『万葉集』には桜を詠んだ歌が 43 首、梅を詠んだ歌が 110 首程度みられる。これが 10 世紀初期の『古今和歌集』では、桜が 70 首に対し梅が 18 首と逆転している。「花」が桜の別称として使われ、女性の美貌が桜に例えられるようになるのもこの頃からである。

『日本後紀』には、嵯峨天皇が 812 年 3 月 28 日（弘仁 3 年 2 月 12 日）に神泉苑に「花宴の節（せち）」を催したとある。時期的に花は桜が主役であったと思われ、これが記録に残る花見の初出と考えられている。前年に嵯峨天皇は地主神社の桜を非常に気に入り、以降神社から毎年桜を献上させたといい、当時、桜の花見は貴族の間で急速に広まり、これが日本人の桜好きの原点と見られる。831 年（天長 8 年）からは

きゅうちゅう てんのうしゅさい ていれいぎょうじ ようす げんじ
宮中で天皇主催の定例行事として取り入れられた。その様子は『源氏
物語』「^{はなえん}花宴」にも^か描かれている。また、『作庭記』にも「庭には花
(桜)の木を植えるべし」とあり、平安時代において桜は^{にわづく}庭作りの
ひつじゅひん 必需品となり、花見の^{めいしょ}名所である^{きょうと}京都・^{たんじょう}東山もこの頃に誕生したと考
えられている。

かまくら むろまち きぞく ふうしゅう ぶしかいきゅう よしだ
鎌倉・室町時代には貴族の花見の風習が武士階級にも広がった。吉田
かねよし
兼好は『徒然草』第 137 段で、身分のある人の花見と「^{かたいなか}片田舎の人」の
花見の^と違いを説いている。わざとらしい^{ふうりゅうぶ}風流振りや^{さわ}騒がしい^{しゅくえん}祝宴に対
して冷ややかな^{しせん}視線であるが、ともあれ『徒然草』が書かれた^{まつき}鎌倉末期
から^{しよき}室町初期の頃には既に^{すで}地方でも^{ちほう}花見の^{えん}宴が^{もよお}催されていたことが^{うかが}窺
える。

織豊期には^{かいが}野外に出て花見をしたことが、^{かいが}絵画資料から確認される。こ
の時期の^{だいきほ}大規模な花見は、豊臣秀吉が行った吉野の花見（1594 年（文禄
3 年））や醍醐の花見（1598 年 4 月 20 日（慶長 3 年 3 月 15 日））があ
る。

花見の^{ふうしゅう}風習が^{しよみん}広く庶民に^{えど}広まっていったのは江戸時代といわれる。こ
の頃、^{ひんしゅかいりょう}桜の品種改良も^{さか}盛んに行なわれた。江戸で最も^{なだか}名高かった花見
の^{めいしょ}名所が^{しのぶおか}忍岡で、^{あまみだいそうじょう}天海大僧正（1536 年（^{てんぶん}天文 5 年）？ - 1643 年（^{かんえい}寛永
20 年））によって^う植えられた^{うえのおんし}上野恩賜公園の^{かくしき}桜である。しかし^{かくしき}格式の高

い寛永寺で人々が浮かれ騒ぐことは許されていなかったため、1720年
(享保5年)に徳川吉宗が浅草(墨田川堤)や飛鳥山に桜を植えさせ、
庶民の行楽を奨励した。吉宗は生類憐れみの令以降途絶えていた鷹狩
を復興させた際、鷹狩が農民の田畑を荒す事への対応策として、鷹狩の
場に桜の木を植えることで花見客が農民たちに収入をもたらす方策を
とったとされている。江戸の城下・近郊の花見の名所は上野寛永寺、
飛鳥山、隅田川堤の他にも、御殿山(品川区)やら愛宕山やら玉川上水
など少なからずあった。この時期の花見を題材にした落語としては、
『長屋の花見』や『あたま山』、飛鳥山の花見を想定して作られた『花
見の仇討』などがある。

明治に入ると、桜が植えられていた江戸の庭園や大名屋敷は次々と取り
壊されて桜も焚き木とされ、江戸時代に改良される多くの品種も絶滅
の危機に瀕した。東京・駒込の植木職人・高木孫右衛門はこれを集めて
自宅の庭に移植したり84の品種を守り、1886年には荒川堤の桜並木
造成に協力し、1910年には花見の新名所として定着。78種が植栽
された荒川の桜は各地の研究施設に移植されて品種の保存が行なわれ、
全国へ広がった(1912年には、日米友好の印として荒川の桜の苗木3000
本がアメリカ合衆国の首都ワシントンに贈られ、ポトマック川畔に
植栽された)」

III. 花見というのはどういう意味ですか。

春の初めから奈良時代に、いくつかの神々が皇帝の咲く花を運んだ際に形成された。でも、江戸時代の17世紀初頭になって初めて、桜の桜村を形成した公園に新しい桜が植えられた。春が来ると、日本中、そして東京、大阪、横浜のような大都市で花の祭りがあるところに桜が咲く。東京だけでも、3、4月に桜まつりで台東区の上野公園、新宿公園など21の公式ポイントが開催された。日本各地で約2週間桜が咲いているので、今度は桜の美しさを楽しみ、春の空気が訪れる最高の時期、祭りとなる。花見は昼夜を問わず約2週間続く。あちこちで、空に輝く桜の花を見た。肌寒い天候ではそれぞれの風がたくさん桜の花を咲かせて吹いて、美しく魅惑的な景色を作り出し、人々の心を揺さぶった。みんな咲く桜の下で集まってパーティーを開いた。

花見の由来は、古来から祓いのための宗教的行事、元々は神事でお祭りだった桜の木の下での春の楽しみといえば、お花見だ。「三日見ぬまの桜かな」と歌われたように、うっかりするとすぐに散ってしまったのが桜である。定番のお花見といえば、桜の木の下で日頃の憂さ晴らしとドンチャン騒ぎ、その日ばかりは無礼講のようにだ。今

日においてはお花見とは名目で、本当は桜は酒の肴にすぎず、飲み食いに重点があるようである。

しかし、花見の由来は、古来から禊はらいのための宗しゅうきょう教的行事ぎょうじだったようである。期日きじつが設定せっていされ、野山のやまに出かけ花を愛あいで、その下で楽しむことで、厄やくを禊はらい神さまと過ごすとされていた。かつては、秋の稔みのりを願ねがい、花の下でお祭まつりをし、花で収穫しゅうかくを占うらったのである。開花は神様が降りられた証で、パッと散ると凶とされた。

お花見は平安時代より貴族が始め、今の京都の二条城にじょうじょうのあたりに天皇てんのうが行幸ぎょうこうし桜見物を行ったそうである。その後、貴族・武士きぞく・ぶしの間で盛さかんになり、豊臣秀吉とよとみひでよしが行おこなった「吉野の花見」は有名だ。江戸時代になると庶民しょみんの娯楽ごらくとして定着ていちゃくする。桜の季節が近づくとなぜか心が弾はずむ。日本人にとって、花見はきってもきれない春の楽しみになってしまったのである。お花見といえば「桜」、何故なぜだろうか？「花」といえば「桜」をさすほど日本人にとっては大切な花となった。

また桜は山の神めじるしが降りてくる時の目印になる木として、特別に神聖しんせいし視されており、お花見に付き物のお酒も、本来は神ほんらいに供かみえたお下がりを皆でいただくものであった。

さくらの「さ」は山の神さまたがみ（田の神さま・稲の神さま）、「くら」は山の神さまかみ（田の神様・稲の神様）のおわします座ざを意味し、桜の木は神様かみさまの依より代だいである。また、「咲く」から来ているという説も

あり、花といえば桜、咲くといえば桜だったとしたら、これも長い歴史の中で日本列島に受け継がれてきた精神的遺産（無意識の日本人好みの花として）ということだろうか。

IV. 世界に伝えたい日本文化～なぜ日本人は花見好き？海外との6つの違い

春といえばやっぱり花見！満開の桜の木の下で仲間や友人とごちそうを囲む宴会は格別だよね。毎年お花見をするたびに「日本人で良かったなー」と思う人も少なくないはず。日本から離れて生活してみると、お花見こそ日本や日本人の良さを凝縮した行事だなと思うこともしばしばだ。古くから日本人に愛されてきたお花見桜であるが、この伝統文化が時代を超えて現在も日本人に愛されるには理由がある。そこで今回は、日本の素晴らしい文化“お花見”が日本人に愛される理由海外との違いを6つご紹介する。

1. 四季を楽しむ心

日本人は古くから四季の移ろいや自然美を感慨深く感じる民族である。俳句には季語を入れて、四季を一つ一つ情緒的にとらえるという感性を育てた。奈良時代に日本に伝わったと言われるお花見は、“日本らしさ”が大事にされ、独自の文化が生まれた平安時代に発展した。平安時代の貴族たちは桜を植えてパーティを開き、美しさをうたいた。これが現代の日本人にも受け継がれているのではないだろうか。

実際に、日本人が「日本にうまれてしあわせだなあ。」と思うことに関するアンケートによると、「四季の美しさ」と答えた人が2番目に多く（5003 票中、664 票。1位は“食べ物がおいしい”で1085 票）、（参照：NHK <https://www.nhk.or.jp/school/>）日本の四季の美しさを誇りに思う人の割合が高いことがわかる。日本人は季節の移り変わりや自然の変化に敏感で、それを情緒的に捉えるという感性が海外にはない独特な日本人の心のようなのだ。

2. お酒が飲める

会社の花見会の主催が新入社員の初仕事という企業もあるようだが、日本で花見が職場でも家族間でも、友人同士の集まりでもされるようになった理由のひとつに、「お酒が飲める」という要素があることは明白である。

1979年、バラクーダーが歌ってヒットした『日本全国酒飲み音頭』の一節に、「4月は花見で酒が飲めるぞ」と歌っている。

この歌はとにかく、嬉しいにつけ、悲しいにつけ、花が咲いても、雪が降っても、何かにかこつけて年中どこでも酒を飲んで陽気にはしゃぐ日本国民の姿を象徴した歌だが、お酒の席を楽しむ日本人を代表する。もし、お花見でお酒が飲めなかったら。きっと今ほどお花見が流行ってはいなかったかもしれない。

ちなみに、海外でもアメリカ・ワシントン DC のポトマック河畔^{かはん}の桜などは有名ですが、ワシントン D.C. では屋外^{おくがい}での飲酒が禁じられているため、桜の木の下にレジャーシートを敷^しくピクニックスタイルではなく、桜並木^{さくらなみき}の下をお散歩^{さんぽ}するのが主流である。お酒を飲むのはおろか、お弁当を食べたり、お団子^{だんご}を食べたりもできない。桜の木の下を人波^{ひとなみ}に押^おされながら歩くので、立ち止まってゆっくり桜の花を観賞^{かんしょう}することもできない。せいぜい記念の写^と真を撮りたい。

そうすると、日本の花見のイメージとは少し違った感じするよね。公共の場で酔っぱらって暴^{あば}れるのはどこの国でもだが、日本では公園で飲酒ができる国であるという点が花見の発展に繋^{つな}がったと言えるのではないだろうか。





3. 気候の良さ

公共の場でお酒が飲めること以外にも花見の発展に繋がった要因がある。例えば、桜が咲く時期の気候の良さ。アメリカ以外にも日本から桜が贈られた国があるが、例えばフランスでは芝生の上でビニールシートを広げ、ワインを片手にバケットにチーズやハムを挟んで食べるピクニックをしている人をよく見かけている。日光浴の大好きなヨーロッパ人はもちろんピクニックも大好きだ。でも、パリ近郊の桜の木がたくさん植えてあるソー公園にはフランス人の姿がない。その原因はパリの気候にあるようだ。

桜が咲く時期の3月下旬から4月上旬のパリは、気温が低く雨の日も多いため、とてもピクニック日和とは程遠い気候である。パリで桜が見ごろの時期に、花見をするにはいろんな偶然が重ならない



となかなか難しいのが現状である。それに比べると、日本の春の陽気は気温もちょうど良く、雨が降ることも少ないため、まさに花見に適していると言えた。私たちが日本

でお花見が楽しめるのも、素晴らしい春の気候のおかげだ。

4. マナーの良さ

花見が日本全国どこでも楽しめるのは、日本人のマナーの良さのおかげだと言えた。「[数字でわかる！日本人と中国人の違い](#)」で

紹介した通り、日本人は最もマナーの良い観光客の第1位に選ばれるほどマナーの良い秩序的な国民である。特に、「行儀が良い」

「礼儀正しい」「ホテルで大騒ぎをしない」といった点が世界の人から見ると評価すべき

ところだと言う。桜が折ら

れて傷つけることなく、美

しい花を観賞できるのも

そんな日本人のマナーの良さがあってのこと。反対に、



花見の場所で暴れて喧嘩する人が増加したり、犯罪が発生したり、

ゴミが散乱するなどの問題が多く見られる場合はお花見ができな

くなってしまいかもしれない。私たちが現在も花見を楽しめるの

は、マナーの良い先祖たちのおかげである。

しかし最近では、前もって広い場所を占有する団体や、カラオケ

の使用や音楽を流したり、火気の使用、立小便、ごみの放置など、

大きな社会問題となっている。これからも日本で花見を楽しめられるように、花見客一人一人がルールを守るようにしよう。

5. 弁当の発展

おいしいお弁当を食べることも花見の楽しみの一つである。風流を解さない人を批判するとき「花より団子」ということわざを用うが、やっぱりお弁当やごちそうなども花見の醍醐味ではないだろうか。

そして、日本で花見が楽しめる理由のひとつは弁当の発展にあると言える。日本では、古くから弁当の習慣が起こり、他の諸国では例を見ないほどの発展を遂げていった。最近では海外でも、日本のマンガを通して“BENTO”が知られる

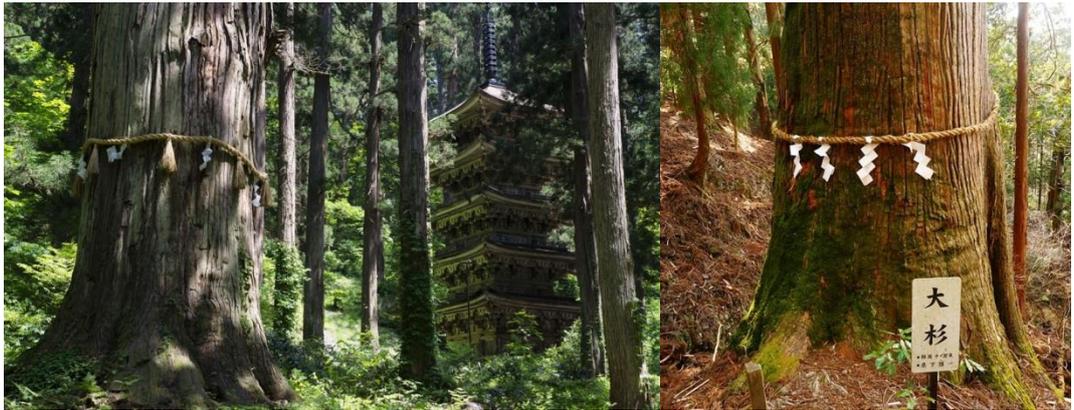


ようになったが、まだまだ弁当は外国人にとっては真新しいものだ。冷めたものを食べる習慣があまりない海外では、ピクニックで食べるものと言えば、サンドウィッチとスナック菓子だ。しかしこれでは少し華が欠けてしまった。

その点、日本の弁当は色味も華やかで、ビニールシートに広げるだけで何だか楽しい気分になれる。日本で楽しくお花見ができるのは、お弁当という日本独特の素晴らしいわき役があるからである。

6. 自然崇拜しぜんすうはい

日本は「万物ばんぶつに神宿かみやどる」として「山」や「木」そして人の手によって作り上げられた「物」に対しても敬意けいと感謝かんしゃを以て接せつする自然崇拜すうはいの国と言われている。桜の木も例外れいがいではなく、桜はその昔、神様かみさまが宿やどる木と考えられていたそうだ。



そのため、ごちそうを持って花見に出かける「山遊び」という習わしが日本全国に広がった。神様かみさまである桜の木をもてなすためにごちそうを持っていき、田植えたうの前に山の神様にお米の豊作ほうさくを祈いのっていたそうだ。

他にも、農家の人は花が開くのを田植えの時期の目安にしたり、良くさく年は豊作ほうさくなどと占うらなったりして桜に親したしんできた。桜の木は稲作中心いなさくちゆうしんの日本人の生活や日本人の純潔じゅんけつ信仰心しんこうしんに深い関わりのある植物だと言える。

まとめ

桜は日本人に一番なじみの深ふかい花だ。日本の桜の8割しを占めるソメイヨシノの花言葉は「純潔じゅんけつ」だそうだ。花言葉が示すようにけがれ

がなく清らかな精神^{せいしん}で、日本人が花見を楽しめる時代がこの先もずっと続いてくるように。平安時代に貴族がうたったように、いつの時代も美しい桜^{なが}を眺められるそんな日本であってほしいと思う。



V. 桜から料理

1. 花見団子^{だんご}

花見には団子がつきものといわれている。「花見団子」などともいい、庶民の花見の供として江戸時代から定番となっており、桜色^{うすあかい}（薄い赤色）・白色^{はくしよく}・緑色^{みどりいろ}などの色で華やかな色彩^{はな}を付けた。この3色の組み合わせが一般的で桜色は桜を表して春の息吹^{いぶき}を、白は雪で冬の名残^{なごり}を、緑はヨモギで夏への予兆^{よちょう}を表現^{ひょうげん}している。

「花より団子」という諺^{ことわざ}は花見団子に由来し、花の観賞^{かんしょう}という審美的な行為より団子という実質^{じっしつ}を選ぶ行動^{こうどう}を揶揄^{やゆ}した物だ。天然記念物^{てんねん}クラスの枝振り^{えだぶ}が見事な桜や梅、歴史のある桜や梅などの下では茶席^{ちやせき}が設けられる事が多い。

2. 花見弁当

江戸時代から花見には花見弁当^かが欠かせない物としてあり、日本酒も持ち運べる構造^{こうぞう}の段重ね^{だんかさ}の重箱^{じゅうばこ}などが使った。現在でも、日本料理店などが趣向^{しゅこう}を凝^こらした花見弁当の注文にに応じている。



3. まとめ

お花見弁当や桜スイーツも。春を満喫できる体験目白押す。

👉 (注意点)

1. エア花見

花見シーズンは、^{きおん めん さんかんよんあつし よ}気温の面で三寒四温とも呼ばれる不安定さがあり、^{さいていきおん さいこうきおん}日較差も大きい（最低気温と最高気温の差が大きい）
^{けいこう}傾向もあるため、^{はなみとうじつ きおん}花見当日の気温に見合った^{ぼうかんたいさく}防寒対策をしないと^{たいちょう くず かのうせい}体調を崩す可能性がある。また、^{よてい}予定していた花見の日^{ふうう みま}に風雨に見舞われることもあるし、^{こんざつ}花見会場での混雑やトラブルを^{きら}嫌う人も多い。さらに、^{か かふん ひさん}花見シーズンはスギ花粉の飛散時期とも重なり、^{かふん かんじゃ}スギ花粉症患者にとって^{しょうじょうあつか}野外での花見は症状悪化を来る。

このように、^{の こ じっし}野外での花見は様々な困難を乗り越えて実施されるため、それらを^{かいひ おくない ぎじてき}回避できる屋内で、疑似的な花見ができるサービスが生れていた。桜の生花や造花をオーナメントとして^{かざ}飾り付ける店舗はしばしば見られるが、これを^{ゆうりょう えんかい}有料の宴会パッケージとした^{いんしょく}飲食のサービスにした場合、「エア花見」と呼ばれる。

2. 問題

花見は^{ぎょうじ}人気が高い行事で、^{しゅえん ともな}酒宴を伴うことが多いため、^よ酒酔いの^{えいきょう}影響や^{よざくらけんぶつ}集団心理などでトラブルが起きやすい。夜桜見物を目

的に、まだ明るいうちから陣取り用に広げられたビニールシートは景観を損なう。

花見が始まった後も、カラオケを歌ったり音楽を大音量で流したりする、火気の使用、立小便、酔った勢いで桜の枝を折つたる樹を傷つけたりする等して桜に悪影響を与える等、他の花見客や近隣住民に対する迷惑行為を行う集団・団体が増えたり、帰路に飲酒運転を行うなど、大きな社会問題となっていた。

特にコンビニエンスストアの増加により、弁当やペットボトルなどをレジ袋に入れて容易に入手可能になる半面、花見で出るゴミの量が急増する。ごみを放置して帰ったり、帰路に所構わない捨てたりする花見客が増えて、各地で花見客によるゴミ散乱が問題になっている。これらへの対処のため、警察官がパトロールしたり、自治体や観光団体が警備員を雇ったりすることもある。福岡市は天神中央公園で、場所取り合戦への対策として予約制を導入したことに加えて、2018年には有料制（1区画2時間で500円）を施行した。

同じようなゴミ問題対策として、近年では神奈川県川崎市高津区瀬田の多摩川河川敷のバーベキュー問題があり、こちらも有料化や条例制定を行うことで、問題の緩和にある程度成功している。

VI. 現在の花見

1. 開花・満開時期の地域差

桜は品種によって開花・満開時期が異なる。各地域での桜の開花予想

日は、毎年2月から4月にかけて各民間気象会社から発表され、同

じ日に開花予想された地域を結んだ線は桜前線と呼ばれる。この前線

は各地のソメイヨシノ（クローン）の標本木を基準にしているため、

気候や地形によっても開花の時期が前後する。ただし北海道では道南

や札幌ではソメイヨシノを用いるが、それが育たない他の地域ではエ

ゾヤマザクラ、さらに開花の遅い根室などではチシマザクラが用いら

れる。逆に開花の早い沖縄では標本木にカンヒザクラを用いた。

緯度の違いや気候や品種の違いから、日本全国の開花時期は1月から

5月までの長期にわたる。

気象庁では、サクラの開花日とは「標本木で5～6輪以上の花が開い

た状態となった最初の日」を指し、満開日とは「標本木で80%以上

のつぼみが開いた状態となった最初の日」を指す。開花から満開までの間は、咲き具合によって「五分咲き」などと表現された。

このように花見の適期は地域によって異なる。年度末の3月が適期の地域では卒業式や送別会、年度初めの4月が適期の地域では、入学式や始業式、歓迎会などとのイメージと重なり合い、それらを祝う宴会として花見をする場合もある。

北海道では4月-5月の開花である蝦夷霞桜えぞかすみもみられる。秋の紅葉シーズンに「観楓会かんかえで」と呼ばれる宴会が実施じっしされる習慣がある。

花見では食品しょくひん・酒類しゅるいが多く消費しょうひされ、宿泊たすうを伴って多数の観光客かんこうきゃくが訪おとずれる「桜の名所」もある。このため春には日本各地で、経済効果けいざいこうかを期待きたいして「桜まつり」等の名称めいしょうでイベントやキャンペーンが開かれる。例えば、青森県あおもり弘前市ひろさきは弘前城ひろさきでの桜の満開まんかいが、関東地方かんとうで桜の多くが散ちった後のゴールデンウィークの重なることが多いため花見目的の旅行先として人気が高い。近年は連休に合わせた「弘前桜ひろさきさくらまつり」より満開が早まる傾向けいこうがあり、桜の樹の根元ねもとに雪を積み上げて連休れんきゅうに重なるよう開花・満開時期を遅らせる調整ちようただしが試みられたこともある。

桜吹雪ふぶきとは桜林さくらばやしや桜並木さくらなみきのある所で風などにより数多くの花卉かずおおが舞はなびらい散るさまであり、その美しさも愛でられる。全て散ちった後には葉は桜ざくらと呼ばれる状態じょうたいになる。

2. 夜桜見物よざくらけんぶつ

夜に花見をすることは夜桜よざくらまたは夜桜見物よざくらけんぶつと呼ばれる。東京では上野公園うえのや靖国神社やすくになど一部の桜の名所では夜桜のために、ぼんぼりを設置せっちすることがある。

東京国立博物館はくぶつかんなどのように普段は一般公開ふだんされていないが花見の季節に特別公開こうかいされたり、六義園よしえんなどのように幻想的にライトアップげんそう

やしやかん
プし夜間特別公開された。こうした機こうよう会もは秋の紅葉でも持たれること
が多い。

VII.日本人なぜ桜の下で花見をするのか？

長かった冬がようやく終わり、春がやってきたことを告げるかのよ
うに満開に咲き競う桜だ。桜の花は、入学や入社など人生の門出を
かざ
飾る花として、日本人の心に鮮やかな印象を残してきた。

1. 神話しんわの時代から桜は、はかなく美しい存在だった。

桜の長い歴史に基づいて、日本人と桜の縁えんは非常に古く、『古事記』や
『日本書紀』では天孫降臨した天照大御神の孫・邇邇じじげい芸命のち（ににぎの
みこと）に求婚きゆうこんされる美しき木花咲耶姫きはなさきやひめが、はかなく散るもの
の象徴しょうちよう（＝桜の花）として書かれていて、桜という名称は「咲耶」か
ら転じたという説がある。

また、民俗学においては、田の神たがみを意味する「さ」と神の御座ござの「くら」
が結びついたという説がある。満開の桜には田の神が宿り、田植えから
収穫しゆうかくまで見守みまもってくれるありがたい存在として、農耕民のうこうみんから崇められ
ていたのである。

2. 桜、梅うめの後塵こうじんを拝はいす

奈良時代になると大陸文化の流入りゆうにゆうによって、中国で愛好あいこうされていた香かお
り高く色鮮いろあざやかな梅が貴族の間でもてはやされるようになります。それ

は『万葉集』に詠まれた歌の数にも表れていて、桜の歌が 43 首、梅の歌は 110 首。いかに梅が当時の人々の心をとらえていたのかよくわかる。しかし、庶民にとって春の花といえば、やはり桜。田の神が宿る木であり、農耕の時季を知らせてくれるありがたい花として、決して欠かせない存在だったのである。

3. 平安時代、桜が植物界の天下を取る

遣唐使が廃止され、国風文化が開花した平安時代になると、支配層における梅と桜の立場も逆転する。平安京に遷都した桓武天皇が紫宸殿に植えた左近の梅が、仁明天皇によって桜に植え替えられたことも手伝って、貴族たちは桜を貴ぶようになったのである。

文献に最も早い花見として登場するのが天長 8 (831 年)。嵯峨天皇が神泉苑で行った「花宴の節」が、それ以後は宮中の定例行事となり、その様子は『源氏物語』の「花宴 (はなのえん)」に描かれている。

4. 平安人の桜 LOVE を今に伝える数多くの和歌

世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし
これは平安時代初期に成立した『伊勢物語』の主人公・在原業平が、桜によって心が乱されることを詠嘆した歌だ。

ひさかたのひかりのどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ。これは『小倉百人一首』で紀友則が桜の花の盛りの短さを惜しんだ歌。花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに同じく

『小倉百人一首』で、美貌で知られた小野小町が衰えゆく容色を桜

かさ えい はるし
 に重ねて詠んたもの。ねがはくは花のしたにて春死なんそのきさらきの
 もちつきのころ。これは さくら めいしょ よしの かよ おも たく
 た歌を数多く残した西行が、死ぬその時まで桜を愛でていたいと切望
 した歌。これら平安時代後期から鎌倉時代にかけての3首に「花」と詠
 まれているのはいずれも「桜」のこと。この時代に桜は花を代表するよ
 うな圧倒的な存在になっていたことが
 わかります。鎌倉時代も桜好みは受け
 つ よしだけんこう ずいひつ つれづれぐさ
 継がれ、吉田兼好の随筆『徒然草』に
 は、貴族が桜を上品に鑑賞するのに
 対して、上京したての田舎者は酒を飲み連歌をして大騒ぎをしていた
 と書かれている。



5. 秀吉の大規模な花見がのちの宴会行事のモデルケースにな る

そして、あづちももやま とよとみひでよし
 そして、安土桃山時代になると、豊臣秀吉による大がかりな花見が世を
 にぎわせた。

ぶんろく よしの おおさか いしよく
 文禄3（1594）年の「吉野の花見」は、大坂から1000本もの桜を移植
 した吉野の山に、とくがわけやすし まえだとしいえ だてまさむね ゆうりよくぶしょう
 徳川家康や前田利家、伊達政宗など有力武将ら5000
 人を招いて5日間も行ったというかつてない盛大なスケール。続く

けいちよう だいが だいが いしよく
 慶長3（1598）年の「醍醐の花見」は、醍醐寺に700本の桜を移植し、
 1300人を招いたことが記されていた。（桜に覆いつくされた奈良の
 よしのやま したせんほん なかせんほん うえせんほん すがた そうかん ひでよし
 吉野山だ。下千本、中千本、上千本と、その姿はまさに壮観）。秀吉

もよお だいはなみかい き はなみ えんかいぎようじ ていちゃく
が催した大花見会を機に、花見は宴会行事として定着である。それに
ともな きょうと じしや やまやま さくら う つた
伴って京都の寺社や山々には桜が植えられるようになったと伝える。

6. 暴れん坊将軍が桜の名所を江戸各所につくった。

さらに、えどじだい はい だいしやうぐんとくがわけひかり そうけん かんえいてら よしの
江戸時代に入ると3代将軍徳川家光が創建した寛永寺に吉野の
やまざくら たいりよう いしよく えど さくらなみき しゆつげん
山桜が大量に移植され、江戸で初めての桜並木が出現する。

その後、だいしやうぐんよしむね しょみん こうらく めいしよ えど かくち
8代将軍吉宗は庶民の行楽のための桜の名所を江戸の各地につ
くる。そこでもよお された花見の宴では身分を問わず無礼講が許され、江
戸庶民は花見を心待ちにして、桜に対する思い入れを深くしていく。

それにより、江戸中期の国学者・もとおりのりなが しきしま やまごころ ひとと
本居宣長の「敷島の大和心を人問わば
あさひ
朝日にほふ山桜花」の歌のように、桜は日本人の心の象徴とされる
ようになったのである。



さくら はな すいめん つ かさ
桜の花びらが水面に積み重な
った「花筏」。桜を表した
うつく ことば う
美しい言葉がたくさん生まれ
たのも、にほんじん さくら たい
日本人の桜に対する
想いの表れか

7. ソメイヨシノとともに日本全国に花見が広がる

桜にとってさらに大きな出来事が、できごと えどまっき めいじ
江戸末期から明治にかけての
ひんしゆかいりよう たんじやう じゅうらい やまざくら はなびら しろ
品種改良によるソメイヨシノの誕生である。従来の山桜の花弁は白
く、花と葉が同時にあらわ 現れるのに対して、ソメイヨシノはほんのり紅を
べに

さした花だけが先に開き、いっせいに散^ちり、その様^{ようす}子は華^{かれい}麗そのもの。ソメイヨシノが全国に植えられることによって、桜の美しさやその意味は全国に広がったのです。春の一時期だけしか見られないにもかかわらない、日本人にとってこの上なく大きな意味をもつ桜。その理由は、人々の暮らしに密^{みっちやく}着し、心^{こゝろ}に寄^より添^そい続けてきた記^き憶^{おく}の継^{けい}承^{しょう}にある。だからこそ桜は今も日本人にとって最もなじみ深く、特別な存在となり得ているのである。

VIII. 花見の樹種^{じゆしゆ}

現代日本で桜の^{わりていど}8割程度をソメイヨシノが占めるようになったのは、明^{めい}治^じ以^い降^{こう}の植^{しょく}樹^{じゆ}による人^{いてき}為^わ的^かなものである。中^{ちゆう}世^せ以^い前^{ぜん}に和^わ歌^かに詠^よまれた桜の多くは山桜であった。江戸時代の花見は、様^{しゆるい}々な種^{しゆ}類^{るい}の桜が次々と咲く「群^{ぐんざくら}桜」を楽しんでいる。

現在、全国に多^た数^{すう}植^{しょく}えられたソメイヨシノは寿命を迎えつつあり、病虫害も起きている。このために多い公園などで桜の植^{しょく}え替^かえが行われている、これにより開^{かい}花^か時^じ間^{かん}が大き^{おほ}く異^いなっていた。例えば、三重県のともやま公園ではソメイヨシノの他に河^{づざくら}津^の桜、吉^{よしの}野^の桜などを交^{まじ}互^りに植^{しょく}えるなどして桜並木^{えんめい}の延^{えん}命^{めい}作^{さく}業^{ぎょう}を行っている。

このため開^{かい}花^か時^じ期^きの異^いな^{こと}る木^こが混^{こんざい}在^{ざい}するなど、僅^{わず}かながら花見の時^じ期^きも異^いなり始^{はじ}めている。

IX. 日本国外の花見

1. 日本統治時代がある台湾や韓国でも花見をする習慣がある。沖縄県より南に位置する台湾では1月下旬から4月頃まで様々な品種のサクラが咲き、特に旧正月明けから陽明山や阿里山といった名所に多数の花見客が押し寄せる。新潟県とほぼ同緯度にある韓国のソウルでは、4月初旬頃から桜が咲き始める。漢江沿いの1600本以上のソメイヨシノの桜並木周辺では「永登浦 汝矣島春の花祭り」が開催され、数百万人が訪れるという。
2. 中国では日本人が直接植えたり贈ったりしたサクラがある大連市旅順口区（龍王塘桜花園、203高地）、武漢市（東湖桜花園、武漢大学）などが有名である。
3. 個人・企業・各種団体の民間国際交流、あるいは姉妹都市交流を通じて、日本庭園が造られたり、街路樹として桜並木が造られたり、公園内に桜並木が造られたりし、花見及び日本文化祭が始まる例も見られる。アメリカ合衆国の首都ワシントン D.C. のポトマック河畔には、1912年に東京市から寄贈された桜が植えられており、全米桜祭りが毎年行われている。同祭ではパレードやステージショーも開催され、アメリカ最大の日本文化祭となっている。ニューヨークのブルックリン植物園（英語版）園内のサクラの遊歩道も第一次世界大戦後に日本から贈られ、現在は桜祭りが開催されている。

アメリカでは他に、ジョージア州メイコンでは多数の桜が植えられており、「世界の桜の都」を自称しており、「国際桜祭り」が開かれる。ハワイ州は熱帯なので大規模な桜並木はなく、ハワイ島のワイメアは高地にあり桜が育っていて、「ワイメア桜伝統祭り」(Waimea Cherry Blossom Herirage Festival)が2月初旬に開かれた。

- 札幌より緯度が高い北欧でも、フィンランドの首都ヘルシンキのサクラ公園（フィンランド語版）は2007年に造られたばかりだが、既に花見と日本文化祭が開催されていた。スエーデンのストックホルムの王立公園（Royal National City Park）にも、日本から寄贈を受けた桜が多数植えられていて、桜祭りも行われた。デンマーク・コペンハーゲンの人魚姫の像がある埠頭近くのランゲリニエ公園（Langelinie Park）の噴水池の両側には、広島のアンデルセンが寄贈した二列の桜並木があり、ここでも桜祭りが行われた。
- ブラジルでは日系人移民がサクラの植樹をする例が見られ、特にサンパウロのカルモ公園には約4000本のサクラがある。南半球にある同市では8月初旬の見頃の時期に合わせてさくら祭りが開催されており、多くの人々が集まる。なお、同じ日本文化である「七夕祭り」の時期でもあるため、七夕の「短冊」が満開の桜の枝にくくりつけられるという独特の風習も生まれていた。

ショッピングモールの飾りつけの 1 つとして花見をモチーフにする
場合には、日本文化を象徴する様々なアイテムを混ぜ込む例も見ら
れた。

結論

本論文は、^{ちいきしやかい}地域社会の^{してん}視点に基づいて花見のリアリティを解明するために、これまで、桜についての研究は数多くみられる。花見に関する知識のほとんどが桜の研究に^{ないほう}内包されてきた。また、桜の研究のほとんどが、桜を中心に、桜と日本との関係を^{たんじゅんか}単純化された^{ほんしつろん}本質論で説明しようとするものである。しかし、あくまでも^{しよくぶつ}植物の一種である桜とその^{しやうちやう}象徴するものに目を向けるよりも、桜に意味を付与してきた人間の営みに注目することが必要であると考え。そこで、そのもっとも重要な人間の営みが花見である。^{じゅうらい}従来の花見研究は^{ぶんげん}文献研究を主な手法としたものや、花見の^{ようそ}一要素だけを^{とら}捉えるものがほとんどである。つまり、現代日本社会における花見研究は^{ほうほうるんてき}方法論的に^{かなら}必ずしも^{じゅうばん}十分に^{せいじゅく}成熟しているとは言えない。そこで、本論文では、^{じんるいがくてきげんちちやうさ}文化人類学的現地調査に基づいた^{じれい}事例研究という^{しゅほう}手法を^{どうにゆう}導入し、^{いさしおおぐち}伊佐市大口という^{ちいきしやかい}地域社会における花見にまつわる^{たやう}多様な^{にんげん}人間の^{いとな}営み、^{すなわ}即ち^{たやう}多様な「花見の実践」を^{じっせん}詳述し、本論文を通して、花見のリアリティを解明し、花見がどのように現代日本社会における一般的な行事として成り立っているのかという問いに迫る。本論文の^{こうせい}構成は^{いか}以下のとおりである。

まず、花見を研究テーマとして選んだ問題意識を説明し、本論文の^{こうせい}構成について説明した。

第Ⅰでは花見について^{がいやう}概要だ。

第 II では、日本における花見文化の歴史的展開について、それを通して本論文の研究対象である現代日本社会における花見の立ち位置を明らかにした。また、花見の受容に関する研究の必要性についても指摘した。

第 III では、花見というのはどういう意味ですか？さくらの「さ」は山の神さま（田の神さま・稲の神さま）、「くら」は山の神さま（田の神さま・稲の神さま）のおわします座を意味し、桜の木は神様の依り代である。

第 IV では、なぜ日本人は花見好き？世界に伝えたい日本文化海外との6つの違い。これは 四季を楽しむ心、お酒が飲める、気候の良さ、マナーの良さ、弁当の発展、自然崇拜だ。

第 V では、桜から料理がたくさんある。たとえば、花見団子や花見弁当だ。

第 VI では、現代日本社会における花見の存在の仕組み、即ち花見のリアリティについて考察し。花見の一般性について、従来の研究の多くはそれを桜に追い求めてきたが、桜を意識しない花見や桜が不在の花見の事例も存在するように、桜で花見の一般性を規定することはできない。そこで、本論文ではその桜の一般性を「娯楽」という概念で説明しようと試みた。花見と春先に元々あった民俗行事との重要度の逆転が見られるが、それは、かつて協働農作業をベースにした集落において、春先に元々あった民俗行事が強い規制力を持っていたのに対し、その後の農業社会の激しい変化に伴い、花見の一般性である娯楽がより多様な個人を集合させやすくなってきたからである。この考察を

拡大すると、現代日本社会において、**娯楽の行事**としての花見は一種の**結集の装置**としての意味を持っていると言える。

第 VII では、日本人なぜ桜の下で花見をするのか？花見の**多様性**、あるいは**多様な実態**を生み出したのは、**各地域、集団、そして個人**による**多様な「花見の実践」**であると言える。本章の結論として、現代日本社会において、花見が一般的な行事として成り立っている原理はまさに花見のリアリティに由来し、それは、日本社会における**多様な地域、集団、個人**においてそれぞれに意味を持ちながら、**地域、集団、個人間**において、**多様な意味が互いに干渉せず、「娯楽」という一般性に包括されているのだ**と言える。

第 VIII では、花見の**樹種**だ。多くの公園などで桜の植え替えが行われており、これにより開花時期が大きく異なっている。

第 IX では、日本外国の花見だ。

本論文の結論としては、**従来の研究**では、**現代日本社会における花見**についての理解が**不十分**であると指摘した上で、**特定の地域社会**ないし**集団、或は個人**による**「花見の実践」**を記述し、**当該コンテキスト**において**解釈**するという**新たな花見研究のモデル**を提示した。

そして、**鹿児島県伊佐市大口**という**地域社会**において、**忠元公園**と**集落の花見**という**形態**の異なる**2つの花見の事例**を**中心**に取り上げ、**上記の花見研究モデル**に沿って分析した。

それを通して、現代日本社会における花見の**二面性**というリアリティを明らかにした。

それは、^{きせいりよく}規制力が^{よわ}弱い代わりに^か包括^{ほうかつ}性の強い「^{せい}娯楽の^{つよ}一般性」と、
^{じゅうそうてき}重層的なコンテキストにおける「^{じっせん}花見の実践」によって^{しょう}生^だみ出され
た「^{じったい}意味及び^{たようせい}実態の^{どうじ}多様性」を同時に^{ゆう}有する^{りょうぎてき}両義的な^{せいかく}性格であると言え
る。

参考文献

これがこのエッセイを完成させるのに役立つ典型的なウェブサイトだ。

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%8A%B1%E8%A6%8B>

[https://www.madameriri.com/2013/03/27/%E4%B8%96%E7%95%8C%E3%81%A
B%E4%BC%9D%E3%81%88%E3%81%9F%E3%81%84%E6%97%A5%E6%9C%AC%E6%96%87
%E5%8C%96%EF%BD%9E%E3%81%AA%E3%81%9C%E6%97%A5%E6%9C%AC%E4%BA%BA%
E3%81%AF%E8%8A%B1%E8%A6%8B%E5%A5%BD%E3%81%8D/](https://www.madameriri.com/2013/03/27/%E4%B8%96%E7%95%8C%E3%81%A
B%E4%BC%9D%E3%81%88%E3%81%9F%E3%81%84%E6%97%A5%E6%9C%AC%E6%96%87
%E5%8C%96%EF%BD%9E%E3%81%AA%E3%81%9C%E6%97%A5%E6%9C%AC%E4%BA%BA%
E3%81%AF%E8%8A%B1%E8%A6%8B%E5%A5%BD%E3%81%8D/)